

前近代日本の都市文化と異界

ニコル・クリー (Nicole Klie)

ハンブルク大学アジア・アフリカ研究科日本学研究室

はじめに

私は修士の頃より近世の妖怪文化に興味を持ち、その研究を始めた。そして今回、学際国際シンポジウム「都市とフィクション」において都市文化という視点から妖怪について考える機会を与えられた。以下それについて述べてみたいと思う。

1. 「妖怪」の定義

この論文のタイトルには広範な意味を持つ「異界」という言葉を使わせていただいたが、以下しばしば「妖怪」という言葉を使うので、これをあらかじめ定義しなければならない。

妖怪研究の代表的人物である小松和彦氏の言葉を借りて言うと、人々の生活世界では「不思議」と思われる現象が存在して、それが超越的力として説明されるならば、「神」や「妖怪」が発生する。そして「神」と「妖怪」の区別については、「神」とは、人々に祀り上げられている超越的存在であり、「妖怪」とは祀り上げられていない超越的存在のことである。この区別は固定的なものではなく、人々のその超越的存在との関係のありさまとともに「妖怪」や「神」

の概念は変化しやすいものである。また、全てのものに霊的存在を認める傾向のあるアニミズム的信仰をもつ日本では、極端に見れば全てのものは「妖怪」や「神」になる可能性があるだろう。¹

妖怪研究では、幽霊を妖怪現象とみるか、特別扱いするべきかという問題が論じられている。もちろんここではそれを論じつづけるつもりはない。現在において、もっとも妥当と思われる諏訪春雄氏による定義では、「もともと人間であったものが死んだのち人の属性をそなえて出現するものを幽霊、人以外のもの、または人が、人以外の形をとって現れるものを妖怪と考えておく」とされている。²

この論文は諏訪氏のこの定義に従いながら「幽霊」という言葉を「妖怪」の下位概念として使いたいと思う。その広い意味でここに使う妖怪という言葉は、具体的な例を挙げれば、茶釜に化ける狸、^{つくもがみ}付喪神³である下駄の化物、皿屋敷の井戸から出るお菊、平家物語からにも有名である^{ぬえ}鶴の化物、沖に現れる海坊主、道成寺伝説の清姫の霊や家でも遭える畳上げの怪や留守の間に出る化物などまったく違うものも含まれている。

2. 都市の妖怪・田舎の妖怪

最近『都市の妖怪』や『都市の怪異』といったテーマの論文がしばしば執筆されている。「都市の妖怪」とは「田舎の妖怪」あるいは「ムラの妖怪」から

¹ 小松和彦『妖怪学新考』、小学館、1994年。

² 諏訪春雄『日本の幽霊』、岩波新書、1988年。

³ 付喪神(九十九神も)は人間に捨てられた日常生活の古道具の化けたものである。古道具が狐や猫と同様に九十九か百年も年をとると化けられるという信仰は古くからあり、室町時代は付喪神の絵巻が多い。

区別されるものだろう。しかし、そういった論文はほとんど見つからない。単に「妖怪」と言った場合、それは「田舎の妖怪」を意味するのだろうか。妖怪信仰の研究は、柳田国男と彼が創立した民俗学抜きには考えられない。そして、地方の口頭伝承を中心に置く民俗学や自然的空間を強調するアニミズムとの結びつきなども存在し、あるときまで妖怪と言えば田舎を想像することが当前だったと言えるだろう。例えば妖怪の重要なグループである動物妖怪、つまり化ける狐や狸や猫は町よりむしろ田舎のものと思われるだろう。山や野原に見える狐火や狐の嫁入りはその俗説の有名な例である。

3. 『都市の妖怪』の研究

実際に妖怪話の歴史と現在を見れば、妖怪は農村世界のものだけではないことがわかる。70年代から妖怪研究への関心が拡大するとともに、宮田登氏や小松和彦氏を初めとする民俗学者は前近代の『都市の妖怪』から現代の実生活やフィクションの世界の妖怪にまで範囲を広げて妖怪を論じて、その研究成果の一つとしては、都市という極めて人工的空間に住んでいても、不思議な現象が突然消えるわけではないことが分かった。人間は超越的なものにあこがれていて、説明できないことにも必要性があると言えるだろう。人間は、人間が抱えている恐怖に対処しようとする。その恐怖に対する説明、つまり妖怪は、人間の生活環境にあれば都市空間にあるのも当然のこととなるだろう。

「現代都市でも妖怪がいるか」という質問は、それは都市化が妖怪信仰に影響を与えたことだけでなく、近代化とその近代化の名の下に迷信をなくそうとした運動の影響⁴のことも論じられているのだが、その二つの研究問題はは

⁴ 例：井上円了『妖怪学全集』、6巻、柏書房、1999-2001。

っきり区別しなければならないと思う。そして、都市化の影響について研究する際には、近代化の出発点とされる明治維新からではなく、日本の都市が大きく発展する江戸時代から調査しなければならないと思われる。

4．前近代都市空間

もちろん、江戸時代の都市は特徴がある。小松氏も指摘するように、前近代都市は「都市空間」と「田園空間」あるいは「商業機能」と「農業機能」の重層した機能を持っていて、これは都市には商人や職人などの町人もいれば農民もいるということであり、都市の背景も商家や職人たちの家屋が密集する地域と田畑や野原、林などが混在したことである。一方に農民的生活文化を相続しながら、その一方では都市文化を生成する都市住民がある。要するに市文化は農民的生活文化と都市の開発とともに新しく発生してきた都市民文化がかさなっていると言えるだろう。むろん、その文化にはいわゆる妖怪文化、つまり「不思議」、超自然的現象に対する信仰も含まれている。土地の開発とともに妖怪の出る場所がなくなってきたことは常識と思われるが、前近代都市は自然的な空間と人工的な空間もあって、そういう意味では不思議な現象が起こる場所が豊かになったことも考えられるだろう。

5．妖怪の出現する場所

妖怪はどのような場所に出没するかというと、そういう場所には例えば「辻」と「橋」がある。辻に関するいろいろな言い伝えはきわめて多く語られていて、さまざまな伝承がある。例えば、産女という妖怪の話には辻が出ることが多い。日本の産女は一般的に出産の際に亡くなった幽霊で、「あの世」

から戻って辻などで通る人に子供を預けようとする。あるいは辻で「だらし」という妖怪に会い、動けなくなってしまう、疲れ果ててしまうという伝承がある。

辻に線香を立てると先祖の霊がそれによって帰って来ることができるといふ信仰もある。また、辻占いもその信仰に属する。その他、いくつかの例も挙げられる。その伝承やかつての葬式行事などから、辻は靈魂が集まりやすい場所であり、「あの世」と「この世」の境にあたる場所だという潜在的思考があったことが想像できるだろう。

橋という場所は地域の一番はずれになっているが、ここはまた同時に辻となっている。川は、つねに境川になる性格があり、そこに橋が架かる。東京の幽霊橋や京都の戻り橋のように、橋の名前がその伝承と関係がある例が多いのである。

そして、特に幽霊がよく出る場所は柳の下だと言う。先ほど出た産女もそうである。柳の木がよく植えてあるところを考えれば、橋のたもとはその一つだろう。

6 . 境界的空間

辻や橋のたもとなど、そういったところの共通点を挙げようと思えば、それは宮田登氏が強調するように全て「境」を表す空間で「境界」にあたる。⁵ほかに妖怪の出る場所として有名な境界性のある空間はいくつか挙げられる。たとえば坂である。坂の途中で滑り転んでしまうと三年で死ぬといわれる京都の清水寺にある三年坂のことである。皿屋敷のお菊が出る井戸も川

⁵ 宮田登『妖怪の民俗学』、岩波書店、1985年。

の向こうも橋のように「この世」と「あの世」との境界を表す場所と考えやすくだろう。そして、その境界的空間は前近代都市には至るところにあった。実は、都市とムラの境でまた新たな境界的空間が発生するのである。

7. 都市のアトラクションとしての妖怪

妖怪はどれほど怖いものであっても、同時に江戸人の憧れの的もあった。今日幽霊スポットと呼ばれるところは当時も町のアトラクションとして存在していた。例えばそういうスポットの一つに本所の七不思議がある。「本所七不思議」は、伝承の形であり、話しの内容と組み合わせがいろいろと変化したのであるが、そのうちもっとも知られているのは以下の八つ話である。「置いてけ堀」、「送り提灯」、「消えずの行灯」、「片葉の芦」、「津軽家の太鼓」、「狸囃子」、「落ち葉なき椎」と「足洗い屋敷」。このように、それぞれの地方の不思議な現象を七つあげる伝統は江戸時代前にさかのぼるとされている。⁶ 本所は隅田川東岸の低地のことで、現在の東京都墨田区の一地区に当たるが、当時ここがどういう地域であったかという、その付近は湿地帯を埋め立てた造成地であった。そういったじめじめした区画は江戸人にとっても不気味であったのだろうか、同じ理由からか池袋の怪談も多い。

8. 妖怪文学の中の都市概念

次に、近世の妖怪文学の中の都市概念について少し述べたいと思う。妖怪

⁶ 横山泰子「江戸の七不思議変遷」『東京都江戸東京博物館研究報告』第5号、江戸東京博物館、2000年、25 - 38頁。

文学の一種である妖怪黄表紙の多くの作品では、「都市」が大きな役割を果たしている。妖怪黄表紙は江戸時代後期に流行った妖怪を主人公とする絵入りの版本であり、当時の風俗をパロディー化したものが多く、いずれにしても笑いの文学である。一般的に妖怪絵本は子供向きに書かれたものと思われるが、妖怪黄表紙の複雑な趣向としゃれ、遊郭や歌舞伎を取り入れた画題を見れば、それらは大人を楽しませるために書かれたことが連想される。

都市が妖怪話にどういう役割を果たしたかを理解するために、「野暮と化物は箱根より先」という江戸時代に流行ったことわざがヒントになる。当時、「箱根の先」は江戸文化が届かない田舎と思われており、そういった土地に化物⁷がいると考えられていた。妖怪黄表紙の作品の多くには化物が江戸に憧れて、江戸に進入を試みたり出没する話が登場するが、坂田金平等の豪傑に退治されたり箱根の先へ引っ込むなどの趣向がある。例えばそのなかの一つに化物の草双紙を多く書いた十返舎一九の作品で『ばけもののみせひらき化物見世開』(寛政12年 1800刊)があり、これには退治された化物が箱根の先に引っ越す場面が書かれている。

興味深いのは、化物が住んでいるその田舎の世界はまるで人間世界の逆さまに書かれていることである。家がぼろぼろであるほど家賃が高くて、大工に壁を壊してもらうなどというところである。妖怪世界の価値観が人間世界の価値観の反対になることは頻繁に見られる趣向である。その作品を通じて当時の風俗や考えを知ることにもできる。もちろん、妖怪世界には人間世界と

⁷ ここは「化物」という言葉を使うが、江戸時代は以上定義してみた妖怪を一般的に「化物」と呼んだのである。「妖怪」という言葉は明治時代以降民俗学的学術用語として使われており、妖怪草双紙に「妖怪」という文字が書かれているところに「ばけもの」という振り仮名が付いているのが普通である。

の共通点もある。『化物見世聞』では、親玉と呼ばれる見越し入道⁸は箱根に着いて仕事を探す。ようやく雀が彼に重い葛籠に入って邪険婆を驚かすという仕事を任せる。無論これは有名な昔話の『舌切り雀』のパロディー化である。妖怪世界でも上手な商売が大切であるからか、婆を脅かすと見越し入道が「親方、もふこのくらいでよかるふ、もう錢たけば、あを脅かしてやつたから」と言われる。

野暮と化物は「箱根より先」にされていたが、日本文学研究者 Adam Kabat が指摘するように、「これは誇り高い江戸っ子にとって自慢の言葉でもあるが、その裏には上方への劣等感も感じ取れる」。⁹ 別な例を挙げると、『化皮太鼓伝』(十返舎一九作、歌川国芳画、天保4年 1833 刊¹⁰) という合巻(従来の黄表紙の数冊で一部としていたより複雑なストーリーを提供する草双紙の一種)がある。最初の場面は「世の中次第に洒落が流行り、昔より野暮と化物は箱根から先のものとなりければ、化物の親玉、見越し入道も箱根の先へ引越しけるが、ふと思ひつき、此折を幸ひ、諸国を回りみんとて」で始まる。つまり、洒落のない化物が、江戸から引っ込んで田舎で暮らす。見越し入道が諸国を回って次々と様々な化物と会うが、人とは一度も遭わず、話の最後まで人間文化と関係がないのである。一九自身は駿河の田舎の生まれで、江戸に入って吉原の法に抵触した事件も有名であり、その一九の人生経験を考慮すれば、都市文化に戸惑う田舎者は彼にとって近いテ-

⁸ 見越し入道は首が長く、背丈が非常に高い入道姿の妖怪であり、江戸時代の妖怪絵本に特に人気があったものである。後ろからのぞきこむと言われるが、地方の妖怪話の中ではイメージと名前がさまざまである。例えば新潟地方では見上げ入道と呼ばれるものの非常に残酷な話もあれば、徳島地方の化けた狸の正体とされる高坊主や愛媛地方の化けたカワウソの正体とされる伸び上がりの悪意のないもののお話もあった。妖怪草双紙の普及の影響でそのものが統一されてしまったのだろうか。

⁹ Adam Kabat 『江戸化物草紙』、小学館、1999年、15頁。

¹⁰ 『化皮太鼓伝』は十返舎一九作の遺作であり、一九の没後二年に出版された。

マだったと考えられるであろう。

9. 「都市化と妖怪」の研究問題

最近、大ブームとなってきた妖怪に関する様々な出版物のなかには、都市の「妖怪出現の地図」といった類のものをよく見かける。そういったものは確かに多くの読者の好奇心を引くが、出現の場所を挙げるだけでは都市と妖怪の関係を説明できない。さらに興味深いのは、都市化が妖怪信仰にどのような影響を与えたかという問題だと私は考える。つまり、都市を舞台とする妖怪話を集めるだけでなく、都市文化の発達と妖怪民俗との関係をより深く研究できれば興味深い。しかし、そこには学問的方法上の問題がある。人間の環境が変われば、ともに人間の想像世界のものである妖怪信仰も変わる。これは当然だと思われるかも知れないが、その変化の原因作用が学問的に証明され得るのは簡単ではない。妖怪信仰の変化の原因は社会や生活環境の変化にあるか、あるいは逆に信仰の変化を生活環境の原因とするべきか、それとも両者は相互的に影響しつつ並行的に変化発展しているのか、これは一概に言えないことのように思う。例えば、住宅地が大きくなり、空き地がなくなる事で妖怪が人々の住居に現れるようになり、日常生活に近づいてきたという仮説がある。妖怪が日常生活に近づいてきたことが確かであっても、その原因は住宅地の拡大にあるということが証明できるだろうか。ほかの原因もいくつか考えられるだろう。むしろ、一つの要因だけでなく、様々な要因から成り立っているのではないかとと思われる。例えば小松氏が指摘するように、近世の都市の妖怪とその説明は、前代と変わって知識人と陰陽道や修験道の宗教者の説明体系によるものではなく、民衆的なある意味では素朴な庶

民信仰へと変質しているのである。¹¹

また、妖怪信仰は妖怪の絵や怪談話を見れば分かるともよく言われている。しかし、信仰が作品の背景にあっても芸術作品の創造はそれほど単純なものではないだろう。個々の芸術家、それぞれのジャンルの決まり、メディアの表現性など、芸術世界にはそれぞれの規則、あるいは条件があるだろう。特に江戸時代の妖怪草双紙や妖怪絵の場合は商品化される大衆文化の特徴も考慮しなければならないと思う。以上挙げた作品等は信仰とある程度の独自性を得たのではないかと私は考える。そして、その新しい妖怪文化のなかでは全ての要素の源が必ずしも信仰と伝統にあるとは限らないかもしれない。このことも都市化、つまり都市文化の影響の一つと言ってよいだろう。

江戸時代には、和歌や連歌において行われていたような、いわゆる「本歌取り」という手法が、メディアやテキストを通じて、文学、絵画、表現などの分野に積極的に用いられた。優れた文学作品は、他の作品の優れた部分を模写し、模倣することによって、その作品に新たな解釈を再構築していくのである。妖怪文化を調査する際にもそのような手法の影響を考慮しなければならないと私は思う。一つの例を挙げたい。

江戸時代に流行ったいくつかの妖怪絵を見れば提灯から現れ出ようとする幽霊に気がつく。するとその画題は四谷怪談のお岩の幽霊だとすぐ分かる。これは提灯がヒントである。鶴屋南北の代表的作品とされる東海道四谷怪談のお岩の話は1825年江戸の中村座で初演された。歌舞伎の舞台「四谷怪談」で道具方が提灯を燃え上げその中から亡霊のお岩を現せる提灯抜けという

¹¹ 小松和彦『妖怪学新考』、小学館、1994年。

「special effect」を考え出したとされる。それでその画題が有名になってまもなくお岩のつきものになったのである。つまり、お岩信仰ともともと関係がないものが歌舞伎の演劇から取り入れられお岩の概念に加わった。

おわりに

人間は恐怖感に対する具体的な説明を与えようとする。時代と生活環境が大きく変化してもこの傾向は変わらないだろう。江戸時代の妖怪もその恐怖の対処、あるいは不思議な現象の説明として存在していた。しかし、妖怪は恐怖の世界だけではなく、娯楽の世界のものでもある。手でつかむことのできない民俗信仰の表現でもあり、文学、演劇、芸術、メディアなど、限界のないフィクションの世界の対処でもある。研究方法を選ぶ際にはそういった世界の規則をも考慮することが必要である。つまり、都市の妖怪にしても田舎の妖怪にしても、妖怪を文学、美術史、宗教学、演劇学、民俗学等の諸分野の立場から研究するべきである。

参考文献

井上円了『妖怪学全集』、6巻、柏書房、1999 2001年。

Adam Kabat『江戸化物草紙』、小学館、1999年。

同『大江戸化物細見』、小学館、2000年。

小松和彦『妖怪学新考』、小学館、1994年。

同『日本妖怪学大全』、小学館、2003年。

諏訪春雄『日本の幽霊』、岩波新書、1988年。

田中貴子・花田清輝・澁澤龍彦・小松和彦『百鬼夜行絵巻を読む』、河出書

房新社、1999年。

宮田登『妖怪の民俗学』、岩波書店、1985年。

同『江戸の小さな神々』、青土社、1997年。

柳田国男『妖怪談義』、講談社、1977年（『定本柳田国男集』第四巻、筑摩書房、1968年）。

横山泰子『江戸東京の怪談文化の成立と変遷 一九世紀を中心に』、風間書房、1997年。

同「江戸の七不思議変遷」『東京都江戸東京博物館研究報告』第5号、江戸東京博物館、2000年、25 - 38頁。